江戸時代から明治期における京仏師と地方仏師

岡田 靖（第二章）
長谷洋一（第一章）

Buddhist Sculptors in Kyoto and Local Sculptors in the Edo and Meiji Periods

OKADA Yasushi and HASE Youichi

第一章
はじめに
❶近世七条仏師―七条左京家
❷京都町仏師と山形
❸京都仏師と在地仏師
❹近世京都仏師と近世仏像の終焉

第二章
はじめに
❶京都七条仏師の地方進出
❷京都仏師から地方仏師へ
❸江戸時代から明治時代への変遷
まとめにかえて

[論文要旨]

仏教の崇拝対象として造像されてきた木製の仏像のほとんどは、漆箔や彩色などで加飾されている。近世の仏像の表面加飾は、その多くが製作当初の状態で今日まで伝えられているものの、膠を主とする膠着材と高湿度な日本の環境に起因してか、剥離や剥落などの損傷が生じ始めており、修復の必要性が高まっている状況である。それらの近世仏を保存修復していく際には、対象となる仏像に使用されている材料の特定や劣化損傷要因の把握が不可欠であり、近世の仏教彫刻史の研究や製作背景などの検証もまた、仏像文化財の歴史的、文化的意義を図るために重要である。ところが近世の仏像に関しては、これまで美術史的価値の評価が低く見られてきたがゆえに、仏教彫刻史的研究や技法材料的研究が十分になされていないのが現状である。

本研究では、従来の研究において見過ごされがちであった江戸時代後期から明治時代に造像された仏像に焦点をあて、近世から近代にいたる仏像の造像に関する歴史的背景を踏まえつつ、近世において仏像製作工房の主流を担った京都七条仏所の動向を軸に、江戸時代中期頃から乱立する京都町仏師の活動を交えながら明治期以降の京都仏師の衰退を概観した。一方で、元禄時代以降に発達した西廻り航路と最上川舟運によって京都と密接に交流した山形に注目し、山形での京都七条仏師の活躍や地方仏師による仏像を対象にしたフィールドワークをおこなった。そして享保、寛政頃を機に緊縮財政の影響を受けて大きく変容する京都の仏像製作業界の動向と、流通の発達によって活性化した山形と京都との交易に起因して発展した地方経済を背景として、山形で展開した京都仏師と地方仏師の仏像製作の変遷についての考察を、近世から近代にいたる仏像の色材研究に資する調査対象作例の紹介を軸にすえて論じた。

【キーワード】七条左京・京都町仏師・近世仏像の終焉・畑治郎右衛門・地方仏師・山形県